

日本の新百景考 一昼と夜

日大生産工 ○山家 哲雄

1. はじめに

近代の世界では、生活環境の均質化が進み、世界中の何処でも同じ文化が支配的になってきた。それに伴って都市とその景観も、何処でも同じ様になってきている傾向にある。

日本では、明治維新以来、100年以上の歩みの中で、都市が画一化してしまい、その伝統的な美を失って、都市や街の景観は醜くなってしまっている。特に日本の原風景は、戦後の経済性・機能性・効率性の追求の中で失われてきた。

本稿では、2009年4月に選定された「平成百景」の好尚を考察するとともに、選定された百景の中でクローズアップされた「夜の街あかり(景観照明)」の役割とデザインについて考察した。

2. 平成百景

わが国は、戦後の高度経済成長を遂げた激動の「昭和」の時代から、天地ともに平和達成への願いを込めて誕生した「平成」の時代に移り変わり、既に二十年余の時が流れた。日本の四季が育んだ伝統的な美観が各地に残る一方で、新たな価値観で見直された景観や、都市の再開発に伴う先鋭的なデザインの建造物が生まれ、危機に瀕しながら再生されたりした場所も多くある。

「平成百景」とは、読売新聞社の主催により、「あなたが選ぶ、新時代の日本の風景」をキャッチ・フレーズに、リストアップされた300か所の候補地の中から、読者投票によって選ばれた好尚景観を、各界の知識人や専門家らで構成された選考委員会によって最終的に選定された100景観である。

選定に当たっては、読者投票のデータを尊重しつつ、かつ地域振興のバランスなどにも配慮し、

- (1) 海外へアピールできる景観
- (2) 環境への意識の高まりを反映した景観
- (3) 平成になって生まれ、再生・見直されたりした景観

などが、最終選考基準に盛り込まれた。

3. 平成百景認定地

最終選定された「平成百景」認定地の上位三位は、

- 第1位「富士山」(山梨県・静岡県)
- 第2位「昇仙峡」(山梨県)
- 第3位「知床」(北海道)

である。

以下、誌面の都合により、上位30位まで認定地を列記(前記される数字は、得票順位)する。

- 4 「十和田湖・奥入瀬川」(青森県・秋田県)、
 - 5 「合掌造り」(岐阜県・富山県)、6 「京都の神社」(京都府)、7 「姫路城」(兵庫県)、8 「上高地」(長野県) 9 「**函館の夜景**」(北海道) 10 「尾瀬」(群馬県・福島県・新潟県)、11 「高千穂峡」(宮崎県)、12 「宮島」(広島県) 13 「**甲府盆地の夜景**」(山梨県) 14 「秩父夜祭」(埼玉県) 15 「縄文杉」(鹿児島県) 16 「東京タワー」(東京都) 17 「美瑛(びえい)の丘」(北海道) 18 「釧路湿原」(北海道) 19 「白崎海岸」(和歌山県) 20 「伊勢神宮」(三重県) 21 「阿蘇山」(熊本県) 22 「黒部ダム」(富山県) 23 「霞ヶ浦の帆引き船」(茨城県) 24 「曾木の滝」(鹿児島県) 25 「日光の社寺」・杉並木(栃木県) 26 「錦帯橋」(山口県) 27 「東京ディズニーリゾート」(千葉県) 28 「蔵王」(山形県・宮城県) 29 「サンゴ礁」(沖縄県) 30 「原爆ドーム」(広島県)
- ※下線付き網掛および網掛は、街の夜景、ライトアップが成されている施設の景観等を含む。

4. 日本の新百景考

最終選定された「平成百景」認定地を考察すると、①四季の変化に富む、日本ならではの複雑で繊細な景観、②緑豊かな自然景が残り、ホッと癒される景観、③長い歴史を刻み、今になっても変わらない風格のある景観などが、上位認定地として選ばれているのが、特に自然景を好む日本人固有の文化性が読み取れる。

さらに、全100景観の中には、「④平成になって新しく生まれた景観(例えば、六本木ヒルズ[東京都])、⑤平成になって見直された景観(例えば、白神山地[青森県・秋田県])、⑥平成になって再生、または再生中の景観(例えば、釧路湿原[北海道])、⑦平成になって希少化、または危機にさらされている景観(例えば、伊根の舟屋[京都府]や珊瑚礁[沖縄県])」が選ばれている。

何よりも、大都市のカラフルな夜景、古くから継承されている祭事や情緒ある街並みの街あかりなど、伝統的な光文化がクローズアップされ、「平成百景」に選ばれているが特に興味深い事項であるとともに重要視すべき点と考える。



図1 「平成百景(上位三位)」と街あかり景

5. おわりに

以上のように、現代日本人の美意識により、新たな平成時代の景観として選定された「平成百景」の紹介と考察を行った。

「平成」時代の日本の景観は、「古くからあるもの」と「新たに誕生したもの」が、混在し、かつ対比を成している。

一日の12時間は、夜であるので、昼の景観だけではなく、夜の景観も美しくなければならないと考える。そのためには、昨今、乱雑になってしまっている夜間の光環境を整理・統合して、魅力的な夜景(街あかり)を創生していく必要があると考える。

また、照明は美しさだけではなく、安全で快適な街を創っていく上でも大事な役割を担っていると考える。

すなわち、そういう総合的な観点から街づくりと街あかりの計画(照明計画)を結びつけて推進していき、各都市、各街固有の歴史と文化、そして光文化を見つめ直す中で、その歴史に立脚して未来に繋げていくことが大切であると考えます。

《参考文献》

- (1) 山家哲雄 著:「光文化の変遷 —ニッポンのあかり考—」、技術セミナー2007 講演資料、(社)照明学会・東京支部、pp.10~15(2007)